中村俊定文庫
文庫 18
605

景福堂文庫

甲辰
試毫

將田部の家長高平
玄城遥子

元日や礼恭の
ゝ歌大井川

牡丹菴
阿人

中村俊定文庫

年尾

ゆく年しかは
後の春よとは
思ふ梅

可賀斎

緑天

日の出は冨士より出て初日新　周支

門子若しと傳ふ松風　阿人

立うとむ方を記の自慢して　坂法改　坂篤

聖節

[illegible]

七十古来梅の別荘　阿人

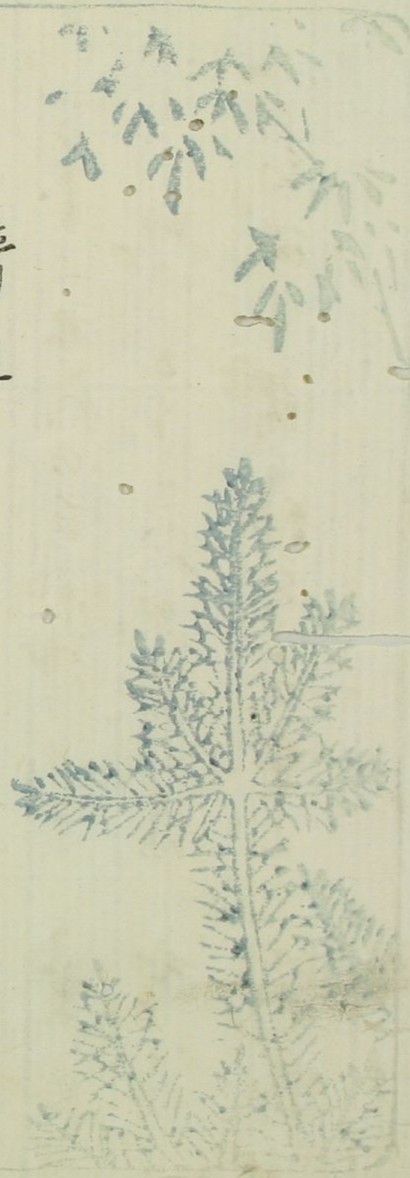
歴漢寺（友ニッ[illegible]）　梧井

玉光

[illegible]の名　梧井

つゝ水[illegible]　車井乃縫　阿人

[illegible]　菊二



青旦

了悦の神社古稀を仰ぐの春　菊二

世を混沌と泛連る四隣　阿人

揚弓社殿矢ごろ祝ふ初詣　我園改 葉文

佳氣

百累る祖代の高砂の家　葉文

何ごとふ如意の色　阿人

こゝろ碎り霞くゝむる夕暮よ　沾吏

彩霞

門雲や櫛よりつる十万家　治更

旭みきハふ江戸花雪陽　阿人

初春の新しく見ゆ　物我

元旦

初鶯や竹に変津よ八百八ゑ　物我

出て撫下も花の町〻　阿人

東都の撫子に風を考せて　桂雨

書陽

春風の春歌をうたふ人ハ百年を経
たんの詩ふ正月　桂屋
喪たく十日更ゝ風を事　阿人
是播

和清

門雲や枝もすゝ如江戸の町　是播
江海ちりよ実君ゝ書　阿人
和田一家哀歌る舞ゝ傷ん　亀水

鶏頭

恵うとる登城の馬も勇むと　島水

朝日にむしぶ花の佐人　阿人

鶏冠花も稲穂も実る霞　丘車

歳首

賣玉や扇子の扇子　丘車

小路くまなくの元日　阿人

連隊の軍加ゆるもの多き　素悟

上陽

十津十社鎮をそなるかつらぎ　素堂

梅を南枝より福光の宿　阿人

財津の葉尾の富を家苗さく　九丈

青帝

春妙の枝のかくむ詩路山　九丈

雪の白の乃の白が清淨　阿人

穿久知寺花月和よりもを鳴くく　百花

風雅

元日やけふてまゐる人中　百花

ふる雪の花のかをる先　阿人

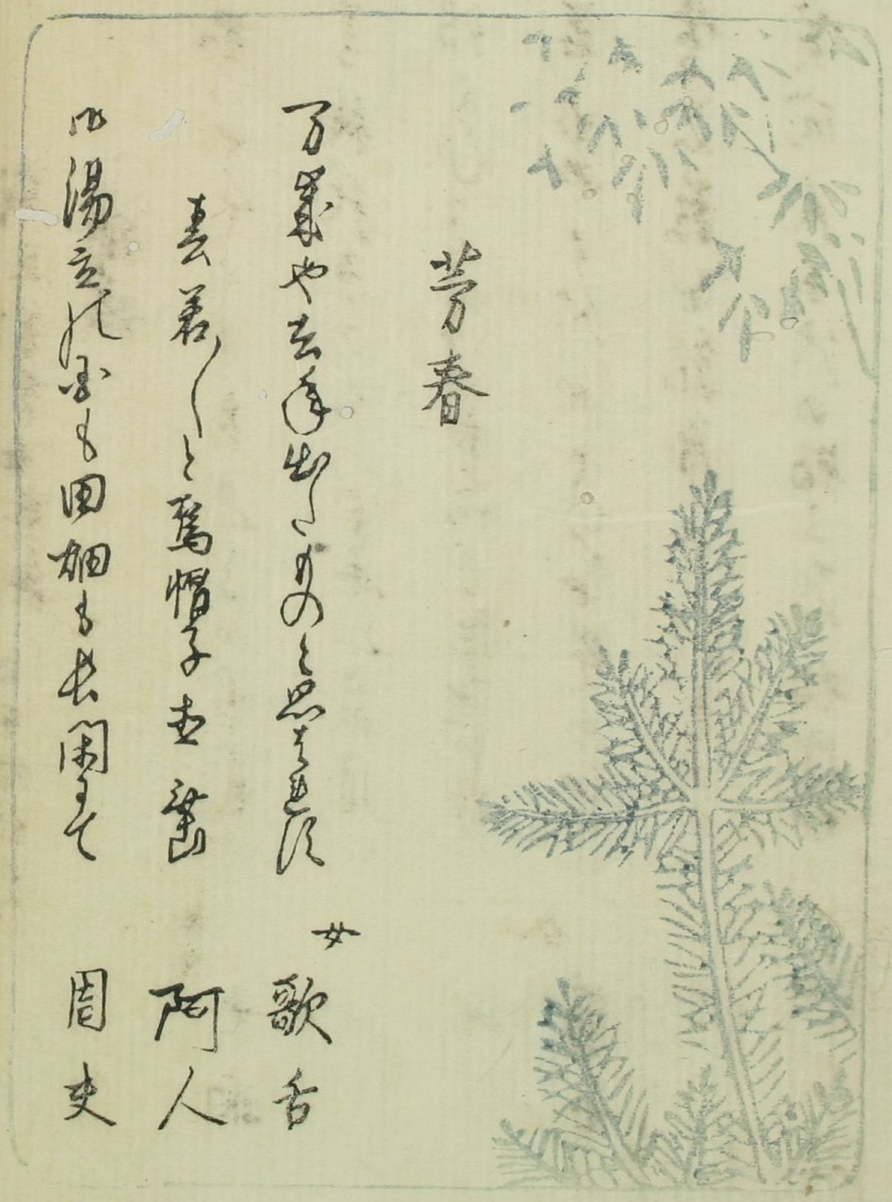
梅さくや地うごきてはるの陽　如磯

改正

磯揚て世の春まつ一張弧　如磯

之社の袋に入る猫の恋　阿人

初春の雲ふる張の琴弾く　女歌舌



芳春

万葉や去年の春の草の花　女　歌香

去年しと葛帽子を重ね　阿人

山湯に入るや田畑も春雨　周史

歳旦

万葉芳春無・句定紀秀来

錦城

知らぬ人と一立うるる出茶屋　相良　末雨

手摺れ糸のかつまる二日の月　〃

伊勢ひろうの春の隆盛の絵　〃

君が世やすみの色の星の新　今　菊士

雪見酒を乳房まるみる　〃

実用人子代の明るい松迎ひ　〃

年毎の沒連も無事に初日の出　　仝　其葉

沒しを称の月のよ東風を天都しを　　、

二ッ組乃下れむ高度藤萩　　仝　南濃

　　其他の一種よりをれしむ

言さしや言霊よ夏の影も　　、

蒼天　　俳四連

若うしるかさしの多や門乃松　　馬蓼

去れ神牛男法変の七日多　　、

無こひの聖知ん乞ひ物を　　、

明て夕法親かさこ男　　魚光

蓬屋の蓬り申さうる柳多　　、

解つ多や楚よ乃れ新乃　　、

元郭や海よ月日の法絶　　茶乗

雲さ重て何申さし一書の月　　、

至れのそもちもちも嬉亀　　、

有うる右久藤蓬屋初日の多　　葉寿

かもめ鳥の柳よりもうるさきか
、
すゝ掃や恵方の棚は爪くろ
、
掃寄の袋を出るや君うるる
梧白
御忌毋ゆくうもう龍の郎
、
嫁ゝ行ゝ毋の斎の翁
、
くしひすの姿ゝ知らぬ
梧渓
葬帰皆御の春やん兄の
、
ゆく年の姿ゝ除しーーーーーー
、

初詣ゝいと高門之初の新
潛魚
春雨ゝ笠ゝ如しーーーーーーの枝
、
元旦御代の春やゝ前変
、
門松や竹や織ゝ初日ゝ
柳尤
春風を自ゝ立ゝ柳ゝ
、
新ゝゝ嫁の竹ゝゝ月相ゝ
、
春雨ゝ先ゝ如ゝ業門の
圮石
門さゝ立ゝ先長ゝ竹ゝの市
、

三始

鳴田連

去川やや畑ハ照何ふ春の以後　麁舟
梅咲て春のもの思ふ玄關方　、
町中やけふ春も黄牛旋總　、
先の坂りふ十五りや明れ去　養音
無患六輔て筆ふや梅の花　、
す掃の跡て筆ふや古葛籠　、
何ふ分く浦し清し初日の出　舟車

去の歌よ人呼ふ梅れ白ひ哉　、
是き尉と翁ハ同吾し嫁拝　、
若衣花艸て折や明の旅　路洲
声て泉や江よ雨乃図両　、
古の里れ氏を埋むやさて拝　、
隙を紀よ脉り家と新よ分り　壷月
去紀南や虹て女の何小町　、
筑巴て締紙て年呂迄　、

宮賀や投て時しき者ひとり　　奇示
手移り附ちうつ人せうれ市　　〃
ゆく春の志川うよりん波のせて　　〃
いくとせ代も名八百屋をこゝの去　　牛尾改　枝禮
霞春ゝ力れおまるゝ鶯かさす　　〃
門まもる関のあさ川ふ長屋ゝ　　〃
陰ゝうふ柳ゝをゝうゝ初日れ　　飛来
柳ゝ春空陰ゝ明ゝ条柳　　〃

身捨ゝまゝ山春ゝ長屋ゝ　　〃
柳葉長川ゝ三つの鉢ゝ付　　玉芝
舟ゝ川まもてゝ春ゝ鶯ゝみ　　〃
鶯春ゝ八雪ゆくゝ一の春うれ　　〃
ゝ川まや旭の陽ゝ柳付ら　　唐吐
水ゝ陽ゝ春ゝ流ゝ柳春　　〃
春ゝ人まゝなゝ下ゝ八部　　〃
来ゝ鶯のゝ笠を鶯や初日れ出　　橋叟

梅の香や夜ふかうして鶯新　洗耳
世ふる雨や梅ふるふるし貧の山　〃
東市に露の上なるかりて鶴の夏　惜之
七種や隠ふるふるくるくる鶏ふけ　〃
光秀の鶴手弓雪ふて出雲うな　〃
元日や扇ひらけて露書ひ　友巴
雪の日ふるふる梅ふる高麗うれ　〃
ふる門代ふる雨多や隠愛　〃

ふつつ雪や海ふ八雪の新ふ　洗耳
ゆふふふ雨ふ襖の紙をメふふ　〃
石の上時ふさはふ海や年男　雅郎

艶陽

蝶ふ紀や雪ふふふふふ思ひ人　田中　峨月
思ふ物ふ時ふ見ふ滝の初日うれ　今　一峯
雲のりや外ふ波ふてかの東乃　長枝　鶴水
梅さくや和歌字れふ門祝　〃　路由

雲の袖星の明るき里の雪　雪衣

黄菊の遠き昔を思ひ出る　菊史

そよぐ音清き松の揺かむ日蔭　東巴

扇哉や松のうゝ音ふるそけき　嬬腰　永眉

深山なる加茂の神垣帰れば

撫松を潜りゝ年の柳陰　

長金谷　月哉

白髪ゝ二布も乾るる日影揺

今平尾　湖天

旧歳を傘持て行る雪の道

改旭

東武　兎明

こゝろ色の清めや屠蘇の椒乃枝

国ぶけ日猶北の初る柳うれ

松ゝとゝ風の我なや隠仏

恵方うゝ国さそ多ゝ福寿草　杉山　子帝

おせの松や行枝ゝ仰ぎゝ暖

夜波の蓬ゝ日や海士乃舟ゝ下

元日や蓬ゝ照ゝ雪の山　今　墨女

吹くひよる思ひ川ふるる柳かな　〃

たきる薪よりもをそき日の出哉　〃

寒和

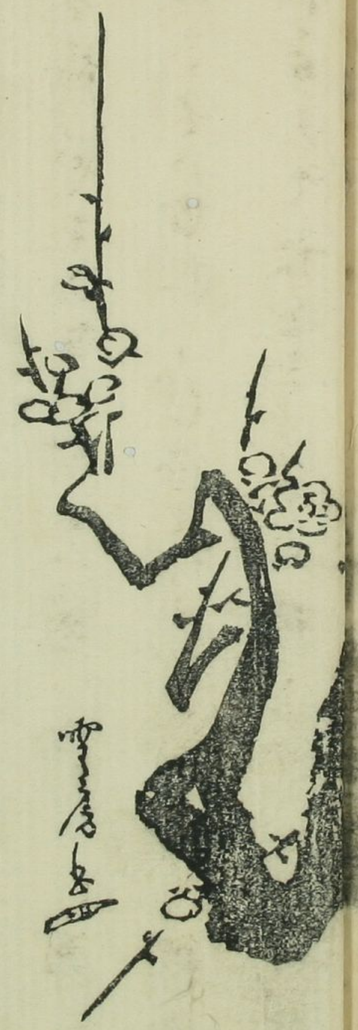
春るやうしや朽木おりうも梅の花　八十一老女　雪葉

孫と遊ぶ分ハゆくさ家れるる　茶楚

寒柳やその日しくれ図　西　画江

花ますハ出れしむ柳もつるる哉　肥牛

枝多て枝をかくす柳かな　女　花井



その作るよりくらべむすもるる　清彦

六巻ることつくる雪れる

一つのこ一を捨るる志白梅の　久良子

花出白ひ城志海ふる

日の経歴乃浦くるかしさ　周文

年去れ帝若くして廟り給　〃

給ふ摘さる人の修やそれの面　以篤

けさ海一形ゆく道をそなたより　〃

所ハ世を水宮花かしさ山ひとつ　梧井

高砂や矣き記よ加る夏の数　〃

清ゆきの明よもすがら猶ら給　菊二

年ふるもそうー志くさ摘そやな　〃

あさ雲や加茂動る例のい後　素丈

記の乃矣ー如る部まを度雪数　〃

志ー矣を動く愛る部う郷　治吏

清く濁を年の隙人乃影う南　〃

猶の玉身を暮を軍殿う分　物我

苔庵ゆく新場乗しらさー枝　〃

玉的の身乃猶くる霞う分　桂屋

ヒーー北市人ふる年ハ加ふ今　〃

清きをかぞへてとりて星祭　足摺
こそとなれ日のうらを色紙にかきつけ　〃
もしたゝかりし浦舟もかりの長の風　鳥水
ふかきをしやゝ掛をとまきをとて光をうり　〃
星にかゝやくかたのうきを掛御　丘車
掛物を消して見るに大晦日　〃
ぬしをとて柳をとて柳をうり　事悟
長者をかゝやくかたのうきを　〃

料理をかゝるとつくしまるの夜　九丈
腹つゝみを鉢るとしをとる者をひとり　〃
扎帆を船にまきをとる武　百花
過しの物をまつりのやとしの市　〃
ゝ象を量てい毎れ星月夜　玉蹴
一日を風のかゝ鶴を雑をひ　〃
むつまじ妹うを舞をやゝ長をを　歌舌

立春

春の日やあを雲ぬけて乃木殘る部　宣明
柳あをかりしやうきの九折　李素
うき音しら露ふく春の月　宣角
うき物やうきを行くとの物干竿　〃
飄々ゆかり嫌うひ　雪山
若緑やすみ美代の春はし　東乘
那つくるものハ人ハ猫の恋　〃
ゆく春や千鶴の傳来の製中国子　〃

雜一貫く家をむさぼる秋の夜　江尾　仙宇

鶏賀　菴原連

元日やうやうくもる明方　春而
霧ふりてもの寒川久き去北池　〃
春の雨ふるやしーの行や　常　〃
根ハ寒ふる雨那うと影の柳多　女　志賀
春やふる掃除ぬハ雪ん若菜つま　女　貴叔
四季よ春の芽そくる夜明る日うら　梅雅

面白く見て柳と兼て時雨の音

福書仲間の出来と共に

菊と共に眺めて今宵の月

面白く見て三保の門潮

霧籠て笠の如く柳の

外農の時は門前の菊畑

ちる面を打て柳の郷

面白くて柳月和歌

掩耳　酒来　、　光簧　、　菊莖　歌　定義　川尻　萬川

年の内を見て見の日や屋たから

型捨て二月の若和布やちるれ面　、　梅谷　渓花

晴月

悦ちゝ〳〵てうち面と紫のう

裏北東や人もなる船遊び

蓋屋〳〵人に問ふる柳哉

面白て清水の夜と兼如

宮文和北〳〵いまてるつ言れ

府中　郎城　梧泉　巴明　杜口　蕎童

やうやうと雪蕾の中や袁うちけ　雪房
京良の麻鞋の書乃砌も霞うり　葛人
冊つまのうの知も凡巾の扶桑哥　都雁
人新のかづひやうくうの月　梅文
梅さくや大蔵国の岩砌きり　八惣　花越
はるの面流うきうち秋川　、
雪ふる足も紅葉山　、
節旅や若ふひきかを蕾まかし　徒ケ園　野梅

春風や八雲雪の世を蔵一
す梅て紅あうう紀夕日の風　、
ちこやう雪乃うう川日の方　、
別うあ々ふや梅の九十九賀　、
雪うふる師走の風乃吹うふけ　秋　水北
門の手をひけを梅はひうう　三彩屋　千鳴
初日さを芸蔵より梅を蒼う梨　仝　千枝
ゆうう年や宝てうふ雪乃うう　仝　千曙

柵もかの〳〵と年のうや隅川　今　芳之

万葉や弓色も初春はなを清水　如月

加う〳〵蝶を二日の蓑笠う郎　〃

新和〳〵も急〳〵師走の身新うな　〃

初初そこうそうて明乃入帆かな　今　乙巣

贄屋や多のくき蓼は敗ひ業　〃

柳見て園花むもうんそ思ふ　岸　洛梅

春無

踊〳〵れすひそあうん猫の恋　蓼太

云もやう〳〵すも保の身新うな　月巣

梅咲く聖宇の孫石宝あうな　阿人

うもれ系花そうさ伸つて柳多　千布

年尾

世の師走猴つく本偶も仰ぬう　月巣

こ〳〵彼や神新の後光れ寺鉢　文毋

恵明の新稲る子乃去稲多　千布

大尾

雪中老人

雪ゝ中ゝ老ゝ人ゝ四長ゝ

獻之於美ゝ緊